

第3回 第3次二宮町男女共同参画プラン策定委員会 議事録

日 時：令和4年3月15日（火） 13：30～14：45

場 所：二宮町役場 第1会議室

出席者：岡野委員長、谷本副委員長、夏目委員、小林委員、帰山委員、磯部委員、
遠藤委員、小野寺委員、吉澤委員、加山委員

町：地域政策課3名

オンライン傍聴者：1名

1. 開 会

（事務局） ただ今より令和3年度第3回第3次二宮町男女共同参画プラン策定委員会を開催する。本日は新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、オンライン傍聴とし、傍聴者は1名。

2. あいさつ

（委員長） 本日は第3回目の会議となるが、男女共同参画について世の中でどのようなことが話題になっているか調べてみた。まず一つ、本日会場に小中学校の教科書が置かれているが、今の教科書は、男女の区別なく国籍も越えた色んなキャラクターが登場していることを目にしていだければいいなと思う。もう一つは、今年の夏に日経BPが発行した「駄言辞典」という本がある。人が発する言葉には大きく二つあり、名言と駄言である。名言は人の気持ちを前に向かせるもの、駄言は人の気持ちを後ろに引っ張って嫌な気持ちにさせるものである。その駄言の方を集めた本である。インターネットで集めたものを分析すると、その多くが男女の違いに起因している言葉であったということである。本の帯にある「家事手伝うよ」という言葉は奥が深い。言っている側と受け取る側の気持ちが全く異なるものである。親切心で言っている言葉だが、解釈する方としては「主体となるつもりがない」と受け取られる。そういった日常的に使っている言葉で、受け取り方にギャップを感じるものが世の中に蔓延していると感じ取ることができる。あまり気にしすぎて萎縮する必要は無いと思うが、そういうことが世の中にあることを意識することが重要ではないかと感じる。

（事務局） 会議の進行については、設置要綱第6条に基づき、委員長にお願いする。

（委員長） それでは、議題に沿って会議の進行をさせていただきます。

まず、議題（1）の「（仮称）にのみやジェンダー平等プラン～第3次二宮町男女共同参画計画～策定方針について」事務局より説明をお願いする。

3. 議題

(1)「(仮称)にのみやジェンダー平等プラン～第3次二宮町男女共同参画計画～策定方針」について

— 事務局説明 —

- (委員長) 只今の説明について、ご意見や率直にどう思ったかなど、何かあるか。
参考資料1のアンケート結果6ページにある「ジェンダー」や「男女共同参画社会」についての年代別集計の分析についてだが、世代として40代の「知っている、聞いたことがある」の回答率が低い。その上の年代だと上がり、下の世代だとまた上がるという状況にあるが、そのことについて何か考えられる理由などはあるのか。若い世代については学校教育が行き渡っているということなのか。
- (事務局) 40代の認知度が低い明確な理由は分からない。もともと40代のアンケート回答率が低いというところはある。「ジェンダー」「男女共同参画社会」の両者が低い結果となっており、はっきりとは言えないが40代にそういった傾向があるのかもしれない。
- (委員長) 「男女共同」や「ジェンダー」という言葉が世の中に出てきたタイミングに何か連動しているということもあるのかもしれない。40代はなぜ低いのか。その理由が分かれば、認知度を上げていくために何をしていけばいいのかにつながるのではないかと。
- (事務局) 40代だと子育て世代の方が多いため、子どもへの教育が親につながっていくことも一つ考えられるのかと思う。
- (委員) 40代は子育てや仕事などで、日頃なかなか社会的なことに関心が持ちにくいかもしれない。
- (委員) 確かに40代は仕事や家事でニュースを見る時間もなかなかとれず、流行りなど世の中全般に疎くなってしまっているなど感じる。10～20代に関しては、今はジェンダーレスな俳優やYouTuberなどが活躍していて、そこからの認知度も高いのではないかと思う。
- (委員長) 世の中、社会に参画していく境目の年代になっているということかもしれない。どうやってこの世代を引き上げていくことにつなげていけるかである。
グラフにある括弧内の数字はパーセンテージなのか、人数なのか。
- (事務局) 回答者の人数である。
- (委員) 学校の教科書にジェンダーが入っているということは、40代につなげていくには、子どもの意識を高めることで、親たちもそれを聞いていくのかなと思う。40代は余裕の無い世代でもあると思う。
- (委員長) 余裕が無くてそういう情報に触れる、そういう感覚を味わう機会が少ないということか。

- (委員) 子どもとの日常的な会話の中に出てくると、親たちの意識も高くなってくるのではないか。
- (委員長) 日常の中でそういう会話や話題が出てくるきっかけづくりを何かできれば。
- (委員) もしかすると子どもたちは教科書にそういった言葉があってもそれを意識せず、自然に受け入れられるようになっているかもしれない。
- (委員) そういった意味では40代は狭間の世代だと思う。40代の子どもの多くは小中学生で、学校で学んで知っていて当たり前のこととして吸収している。それについてあえて家で話題として出さないと親には届かない。50代以上の子どもになると、もっと自分ごとで身近なものになり、家でそういった話題が出ることもあり親に影響を与えるのかなと思う。最近の子どもは、ドラマなどで同性愛なども含め、色んなパターンのものが多く出ているのをナチュラルに受け入れている。そういった子どもの感覚が親に跳ね返ってくるのは、40代ではなくその後の世代になると考えると、40代は狭間の世代になる気がする。そういう意味では、40代の世代へ働きかけをすることは効果がある。例えば、ステレオタイプなことを言う父親に対して、子どもが「今の時代はそうなんじゃないんだよ」と言えるのは、40代ではなくその後の世代の子どもになると思う。
- (委員長) 今の学校の出席番号は、男女混合のあいうえお順となっている。初めからそういう環境だと、子どもたちは今更意識しないし話題にもしない。例えば、今の子どもたちは「スマホはすごい」とは誰も言わない。それが当たり前の環境にあるからである。そういった環境で、あえて話題にしていくことの難しさを感じる。
- プランの重点目標3が「性別に関わりなく」から「ひとりひとりが自分らしく」へ変更があったが、それについて何かご意見はあるか。言葉の一つ一つに捉われ過ぎない方がいい部分もあると思うが、何かご意見はあるか。
- (委員) 将来像の「誰もが自分らしくいられるまち」、重点目標の「自分らしく」はとてもいいと思う。小学校では「自分が好きなこと、自分らしく」より「みんなと同じように、仲間と一緒に行動」という傾向や風潮がどちらかといえばあるように思うが、中学校にはそれぞれの校風があり、場合によっては、いじめなどで小学校とは別学区の中学校に入学するといったケースも聞く。「自分らしく」はとても良い、大事にしていきたいと思う。
- (委員長) 例えば「男だから、女だから」などそういったことは関係なく、それぞれのキャラクターでいられることが良い。そういう意味において「自分らしく」に変更したことは、良いことではないか。

(2) 「(仮称)にのみやジェンダー平等プランの骨子案」について

— 事務局説明 —

(委員長) まず目標があり行動を分解して、最後は実践的なアクションに落とし込む、そういった3構造となっている。資料2の施策体系図(案)に、何か抜け漏れがないかをチェックしていくのはどうだろうか。もっとこういう視点が必要ではないかなど、ご意見をいただきたい。

(委員) 前回の会議でも意見として挙がっていたかと思うが、一見すると、施策の言葉からジェンダーや男女共同参画のテーマが見えづらいところがある。例えば、施策(案)7「多様な家庭の安心な暮らしの形成」や施策(案)8「心と身体健康づくり支援」や施策の方向(案)17「ライフステージに応じた健康管理」、18「人生100年時代」の生涯を通じた健康づくりも、これらを見ただけではジェンダー平等プランではなく、町の健康政策という印象を受ける。もう少し具体的な施策を言葉として入れ込んだ方が分かりやすいのではないかな。

また、施策の方向が啓発や取組などで終わっており、アンケートと啓発結果が結びつきづらくなっている。アンケートは町民の男女共同参画プランやそれらに関する施策、また自分が置かれている環境への思いが結果となっているが、施策の方向はこういう風にやっという計画の作りとなっている。その計画についてどうだったかというのが、このアンケートでは見えにくい。どういったところで町民が取組で男女共同参画社会を感じたかがアンケート結果にあるといいと思う。例えば、団体の「にのみやおはなし会」が男女共同参画プランに関する啓発活動していると資料で見たが、実際に「にのみやおはなし会」の知り合いに聞いたところ、図書館の特設コーナーに男女共同参画社会に関する本を集めたことがあると言っていた。せっかく取組をしても、何が町民の皆さんの心に響いていたかが分からない。施策の中に取組結果のフィードバックをもう少し入れた方がよいと思う。

(委員長) アンケートをとって、そのアンケート結果の分析をし、その原因を払拭するような対策を考えるということか。

(委員) 団体に対してもフィードバックがあれば、良い循環ができていくのかなと思う。アンケートが、町民がどう感じたかだけになっているため、その間をつなぐようなことができればいいのではないかな。

(委員長) 何か施策を行った場合、その施策が順調に行われているか、どういう指標で管理していくのか、その成果をどうやって刈り取っていくのか、その部分まで見据えていくということか。

(委員) 次回のアンケートでは、男女共同参画社会について何をもってそう感じた

のか、そういった設問も入れてヒアリングすることで、効果があったかどうか分かると思う。

(委員) P D C Aサイクルが回っていないと。

(委員長) 現行のプランには、所謂、管理指標はあるのか。

(事務局) プランには評価指標、数値目標がある。

(委員長) 管理指標は設定されているということか。

(事務局) そうである。施策ごとに設定をしている。

(委員長) 管理指標とアンケートをどう結びつけるのかということである。アンケートを改善していくか、K P Iのこの指標が適切でなかったか、どちらかだと思ふ。この先のアクションに入っていくときに、ここで設定した目標などが適切であったか、判断する材料が必要となってくる。

施策体系図(案)において、必要な部分の項目立てはされているか、網羅されているか、どうだろうか。

(委員長) 先ほどのアンケートの世代集計で40代が低く、その前の世代が高く、それ以上の年代が高いということだったが、施策の方向(案)2「子どもに向けたジェンダー平等意識の醸成」が入っている、そういったところや、もっと間の世代に対する平等意識の醸成が必要ではないかなど、アンケート結果から感じとれたところは何かあるか。

(委員) 今後10年間の長いスパンの骨子(案)となるが、男女差が無くなりつつあるなかで、一方、このコロナ禍で「生理の貧困」など改めて格差が認識された部分がある。非正規雇用のパートなどとして女性の労働力などが、如実に表れてしまったところがある。プランに入れた方がいいのではなく、議論をしておいた方がいい部分として、性別によって困難を抱えた方たちを救う施策はこの骨子(案)に入ってくるのか。その部分は乗り越えた先として、施策(案)4「働く場におけるジェンダー平等の促進」の施策方向(案)8「ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた取組」や9「女性の活躍推進」に含まれていると考えていいのか。

(事務局) 施策の方向(案)16「多様な家庭への支援体制の整備」で、ひとり親家庭や多様な人々多様な家庭を包括できると考え位置付けている。

(委員長) 先ほど出た施策(案)8の「心と身体の健康づくり支援」などの言葉尻はどうか。

(委員) 国の計画である「男女共同参画基本計画」には、「生涯を通じた健康支援」など、そういったタイトルのものも位置付けされている。一見すると「男女同参画」はどこにいったのかとみえるが、「不妊治療」のことなどが記載されていたりする。今後、施策の方向(案)にぶら下がっていく事業を考えていく中で、改めてタイトルを考え直していくのも良いのかもしれない。

(委員長) この施策・施策の方向といった「枠」だけが、一人歩きすることはない。そういった意味では大丈夫ではないかと思う。今後、実際の事業、アクシ

ョンを見て、また考えていくのはどうか。

(事務局) 次回以降に素案をお示しする際には、事業の部分もお伝えしていく予定である。

(3) 「二宮町パートナーシップ宣誓制度」の導入について

— 事務局説明 —

(委員長) 当事者だけでなく周りも受容していける、そういった社会、仕組みにしていこうというものである。

(4) その他

(委員) プランの施策の方向(案)1と2のように啓発対象を分け、子どもをあえて別に設定した理由は何かあるのか。先ほど話もあったが、子どもは日頃男女を意識しないで過ごしており、成長していくと、性別役割分担意識が刷り込まれていく部分があるように思う。

(事務局) 教育という部分を重視する意味合いで「子どもに向けた」という文言を入れた経緯はある。

(委員長) 特別に「子ども」を切り取る必要はあるのか。

(事務局) 特段そういう必要性はない。これら施策の方向にぶら下がっていく事業は、大人から子どもまでを対象としていくため、「子ども」に特化しない施策の方向性への変更を考えさせていただく。

(委員長) 今回、教科書を用意していただいた意図としては、子どもたちの世界はこうなっていると理解、体感していただくのもいいのかなと思ったからである。男女の区別を越えて、肌の色や言葉の違いを子どもたちは乗り越えていて、教科書もそういった世界になっている。

意識がどちらかに偏っている部分や意識が足りないところを重点的に取り組んでいった方がいいと思う。

(事務局) 委員長からご提案を頂いて、本日、教育委員会から小中学校の教科書を借りてきている。教科書の中からいくつかをピックアップした資料を、ここで説明させていただく。

— 事務局 「教科書」説明 —

(委員長) 教科書のイラストを見て分かるように昔と様変わりしているのを感じていただけたと思う。子どもたちはこういった世界で、学校の中でも過ごしており、意識も自然と初めからそうなっている部分があるように思う。昔

でいうと、ランドセルの色は赤と黒のみだったが、今は24色ある。昔は革の塗装技術の関係で赤と黒のみだったらしいが、2000年初頭に、とある会社の若い社員が「他の色はできないのか」という会議での発言がきっかけで、ローズが出てきたとのことである。その時に世の中は「あれ、違う色でもいいのではないか」となったらしい。その後、イオンが24色のランドセルを出した。今は男女区別なく、自分の好きな色のもを使っている。それでも人気色はあるという。今の子どもたちは自然と「男女」を越えて、それこそ多様性であり、自分の好みでという時代になっている。

(委員) ランドセルの色を選ぶ時に親戚の男の子が赤色のランドセルを選んだが、親が赤色は「女の子の色だから」と言った。まだ親もそういうことに慣れていない。

(委員) 自分は明るい色やペンダントなどの装飾品も好きだが、子どももそうで自由だった。親の影響は強いのかもしれない。

(委員) 男の子の赤色のランドセルは定番の話である。戦隊物ヒーローのリーダーは赤なので、赤はヒーローの色として選択する男の子が多く、それを止める親も多いと聞く。

(委員) ランドセルを6年間使うことが重く捉えられる。

(委員長) そのうち途中で色が変わえられるかもしれない。

(委員) 色の着せ替えができたらいい。

(委員長) 将来的にそういう時代になっていくんじゃないかと思う。
教科書をきっかけに、今の子どもたちのそういった世界を体感していただけかと思う。

4. 閉会

(事務局) それでは、只今をもって、本日の第3回策定委員会を閉会とさせていただきます。